

# 中澤紀子論文内容の要旨

## 主 論 文

### Psychotic-like experiences and poor mental health status among Japanese early-teens

日本の十代早期の子どもにおける精神病様症状体験と精神的不健康状態  
中澤紀子 今村明 西田淳志 岩永竜一郎 木下裕久 岡崎祐士 小澤寛樹  
ACTA MEDICA NAGASAKIKIENSIA 2011 in press

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻  
(主任指導教員：小澤寛樹教授)

## 緒 言

精神病様症状体験 (psychotic-like experiences (PLEs)) の疫学研究では、思春期・青年期に何らかの PLEs があつた者は、その後統合失調症やそれ以外の精神科的疾患の発症率が高くなることが報告されている。また PLEs のような精神科的な疾患の予兆に対して早期に介入することで発症を抑える、症状を軽減することができるという先行研究からの報告も多い。

一方で、PLEs のある子どもはその他の精神病理を併せ持つリスクが高いという報告もある。本研究では長崎県の公立中学校に通う中学生を対象に PLEs の頻度を調べ、PLEs と精神病理に関する項目及び「学校や家庭における満足感」との関連を調べることを目的とした。

## 対象と方法

長崎市内の9校の公立の中学校の生徒約5374名を対象に、無記名自己記入式の質問紙調査を行った。生徒は自分の所属学級で調査に参加した。調査項目として過去に三重県で行われた以下の調査項目；基本属性（年齢、性別、身長・体重、家族構成など）、睡眠に関する問題、過敏性、ダイエット経験およびダイエット目的の嘔吐の有無、アルコールやタバコの使用経験の有無、医療機関受診に関する事、PLEsの有無、自殺念慮、集団場面での緊張の有無、衝動性、信頼できる友人の有無、いじめや虐待の体験、TV、PCや携帯電話に関する事、精神的健康度（GHQ(general health questionnaire)-12を使用）等に加え、今回特に「学校や家庭における満足感」に関する項目を追加し調査を行った。

統計解析 PLEsの頻度を調べた。次にGHQ-12の結果によって分けられた精神的健康度とPLEsの関連をロジスティック回帰分析によって調べた。全ての質問項目とPLEsとの関連を、ロジスティック回帰分析によって個別に調べた。またGHQ-12以外の全ての項目に対してステップワイズ法（変数減少法）により変数選択を行いロジスティック回帰分析を行った。

倫理的配慮 本研究は長崎大学倫理委員会の承認を得て実施手続きを施行したものである。調査用紙は匿名で提出（個人が特定されることはない）、参加したくない場合には白紙で提出、調査用紙は封筒に入れて提出（学校関係者が見ることは不可）とした。生徒・保護者に対しては研究の説明文書を配布した。各学校は調査実施が終わり次第、研究者に調査用紙を返信した。

## 結 果

調査当日 397 名 (7.4%) の生徒が欠席、参加拒否が 32 名 (0.6%) であり、最終的に 4864 名 (90.5%) が調査に参加した (平均年齢 13.8±0.8、男子 2429 人(49.9%)、女子 2435 人(50.1%))。調査に参加した生徒は長崎市内の全ての公立中学校の生徒の 35.3%であった。

PLEs 項目 4 項目のうち、一項目以上の項目において“あった”と答えた人は 16.4% (797 名) であった (男子 386 名、女子 435 名)。精神的不健康群 (GHQ-12 の得点が 4 点以上) は 2070 名 (42.6%) であった。PLEs と精神的不健康群の関連を調べたところ、PLEs の得点が大きいほど、精神的不健康群に属しやすいことが示された。

「学校や家庭における満足感」の欠如を示す 4 項目はすべて、精神病理に関する項目やその他の項目 (学年、家族構成、信頼できる友人の有無以外) と同様に PLEs と有意な関連が認められた。またステップワイズ法を施行し、GHQ-12 以外のすべての項目を統制した後も、PLEs と「家庭における満足感」の欠如との関連の有意性は保たれた。

## 考 察

本研究では PLEs の頻度は 16.4% であり、思春期の子どもの PLEs の頻度を調べた他の研究 (15 - 20%) に近い結果となった。しかし三重県での先行研究 (15%) と比較すると我々のほうが PLEs の頻度は若干高かった。それに関しては調査の時期や調査地域の人口密度などの影響が考えられる。

GHQ-12 における精神的不健康群と PLEs との間には明らかな関連が認められ、PLEs が多いほど精神的不健康群である傾向がみられた。これらのことから PLEs のある子どもは他の子どもに比べ情緒的に苦悩を抱えていること、生活の質に何らかの支障があることがうかがえる。

PLEs とそれに関連する要因については、本研究では新たに PLEs と「家庭における満足感」の欠如との関連を見出した。日常生活環境における満足感の欠如は DSM-IV-TR の Major Depressive Episode の主要な 2 つの症状のうちの一つである「興味または喜びの喪失」とも関係するものである。本研究は PLEs と「家庭における満足感」の欠如との関連を、表面的には社会生活に適応している中学生を対象とした調査で見出した。先行研究においては抑うつ症状と PLEs を併せ持つと精神的な疾患の発症のリスクが高まるという報告もある。今回の結果は、PLEs を持つ子どもが潜在的な不適応状態 (特に家庭で) にある可能性を示しており、また今後彼らが統合失調症などの精神疾患に罹患するリスクが他の子どもよりも高いことを示唆するものである。